て置くことは云ふまでもないが、更に消息子で注意を加へて之れを確めた後、僅に頸管の擴張を行つて、之れに適した「カテーテル」を子宮底にまで挿入し、僅なる時間待つて、子宮口が「カテーテル」に密著した後に送氣を始める。

この方法の利益は金屬製「カテーテル」を用ひないから、子宮腔の形に従ひ易く、従つて子宮の損傷や痛もなく、外子宮口を氣密に壓迫する必要がない爲に經産婦で頸管裂傷のあるきにも用ひられる。また開腹手術の際にも一人の助手が「マンメーター」の示針に注意しつゝ通氣すれば、手術中に卵管通氣の狀況を目前に見ることを得る云ふやうな點である。其の詳細に就ては原著を参照せられたし。

(木下抄)

ミクリッツ氏法用壓挫子の改良型に就て

Francis M. Findlay, M. D. 述(Ann. Surg. Vol. 103, p. 471, 1936)

人工肛門閉鎖手術に際して在來用ひられたる壓挫子は狭小且つ短に過ぎ輸出入兩脚間の腸壁壓除部が不充分にして其の結果吻合部の腸内容物の流通不良なるため手術は屢々失敗に歸するところがある。此處に述べる改良型壓挫子は、長く且つ幅廣く作られ、壓迫壊死により腸壁を脱落せしめて充分なる吻合面積を得るこゝが出

第一圖

来る。

即ち此の改良型壓挫子は第一圖の示す如くであつて全長は五・五吋、其の末梢三・五吋は壓挫面となり、幅は〇・二五吋である。

此の大きなれば肥滿者にして腹壁厚き場合にても充分其の目的を達するこゝが出来る。兩壓挫子は螺子釘を以つて互に連結され、螺子Bによつて其の壓挫子は間隙距離一吋の間を自由に調節し得る。且つ固定用螺子によ

第二圖

つて所要の間隙即ち所要の壓挫力に固定するこゝが出来る。壓挫用の鋸齒狀面は腸壁を咬合するのに充分にして滑脱する如き事はない。調節

用螺子Aは壓挫力が平等に腸壁に作用する様な装置になつて居る。此の壓挫子を患部に装置した場合腹壁より突出する部は短く、腹帯により被覆は充分可能で且つ容易である。故に外來患者にも使用可能である。一度此の壓挫子を装置すれば五―七日で腸壁が壊死脱落する迄、所要の壓挫力を保つ様固定用螺子の弛緩を注意するのみで其の他の顧慮は一切無用である。腸壁壊死になれば壓挫子は自然に除去可能となる。斯くして吻合の目的を達すれば肛門閉鎖術は在來の術式に準じて所要の時に施行し得る理由である。

(野崎抄)

腔洗滌器

Dr. ED. von Zalewski (Berlin) 述 (Die medizinische Welt Nr. 34. 22. Aug. 1936)

腔洗滌は婦人科的下腹部疾患の治療上意義深きものであり、従つて其の器械も醫師側から注文されるべき主要な條件が存在する。醫師に依りて子宮鏡使用の下に行はるゝ洗滌は別として、從來の洗滌器では合理的な洗滌、淨清、腔の消毒の目的は達せられない。周知の如く正常状態の腔腔は空洞ではなく、寧ろ腔壁は狭く密接してゐる。故に洗滌孔を有する硝子管又は硬護謨管では腔壁の灌漑は不十分で、有力な壓及び十分に深く送入された場合に腔部の

洗滌の幸な例に限られてゐる。然しこれは衛生的、尙又治療的關係に於て洗滌の實際の目的には叶はない。蓋し無條件的に必要な深さに此の洗滌管を送入することは大抵の場合行はれない。

こいふのは無經驗から或は負傷危惧からでもあり、或は又殆どすべての患者が「イルリガートル」洗滌を立位又は坐位で行ふからである。

其の外、挿入管から洗滌液の流出が往々妨阻されたり不十分であつたりする。乃ち内腔軟部の壓迫により、或は其のために細小な洗滌孔が腔分泌物によりて閉塞され易いからである。此の強壓を用ひたときの不快は、之に依りて空氣及び液體の鬱滯が起りて、所患生殖器官の障碍を伴ふ腔内に有害なる過壓を招來するこは睹